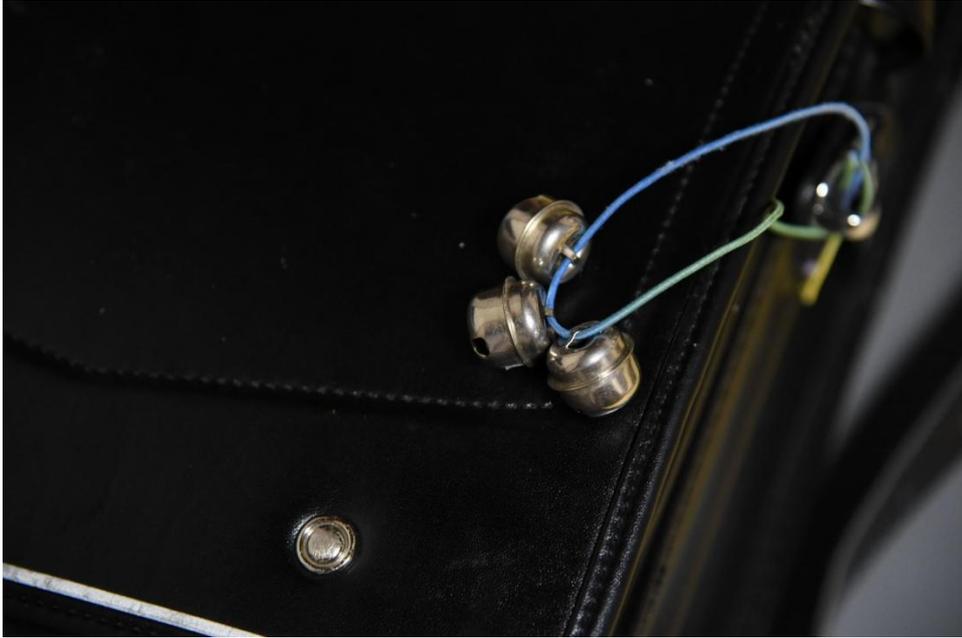


2025年「熊騒動」が問いかける、中山間地の暮らしの持続性



小学生の通学カバンに付けられた熊鈴

■のどかに響いていた熊鈴の音が…

2025年、「地方」というカテゴリーで最も大きかったニュースの一つが、熊だろう。

環境省のまとめによれば、11月末現在の被害人数は230人。そのうち死者数は13人に上る。すでに通年ベースで、2006年の統計開始以来、過去最悪の被害数になっている。「玄関先で襲われた」「市街地にも出没した」といった事案が相次いで報じられ、不安と恐怖が広がった。

山学が拠点を置く岐阜県本巣市の山あいでも、熊に対する警戒感が高まった。ここはもともと「熊は近くにいるものだ」という意識が浸透した地域ではある。3年近く前、市北部の根尾地域にある山城、長嶺城（ながみねじょう）の城跡を訪れた際、立ち並ぶ木の幹の1本1本にビニールひもが巻き付けられている光景を見かけた。案内してくれた地元の方が、「熊が樹皮をはいでしまうのを防ぐためだ」と教えてくれた。



南北朝時代の山城、長嶺城の城跡。

木の幹に青いビニールひもが巻き付けられているの見える。

2023年3月1日 岐阜県本巣市根尾長嶺

地元の小中学生たちは、普段から通学カバンに熊鈴を付けている。また、「熊下校」と呼ばれる措置もある。校区内で熊の目撃情報があった際、徒歩による下校を取りやめ、車で送迎する対応のことだ。学校から保護者への連絡で、「熊が出没したことに伴う下校措置」という文言ではなく、「熊下校」という必要最小限に凝縮した3文字が用いられるところに、地域と熊との近さが表れている。

熊鈴のシャンシャンという音も、「熊下校」という言葉も、これまではどこか山あいののどかさを感じさせるものだった。だが、2025年はそうも言っていない緊張感を伴って響いた。

■店の営業、教育、イベント…日常生活に及ぶ影響

熊の出没は、この周辺住民の日常生活に多方面で影響を及ぼした。

近隣のある飲食店のすぐ近くで11月、熊の目撃情報があった。自然に囲まれた豊かなロケーションが魅力の飲食店だ。目撃情報の数日後にたまたまお店を訪れると、いつものにぎわいに比べて空席が目立つ。店主によれば熊の出没後、周辺には警察やマスコミが駆け付け、猟友会により罠も仕掛けられた。そんな物々しい様子がニュースで報じられ、

「ここ数日はお客さんが少ない」という。「とにかく早く落ち着いてほしい」。そう話す店主だったが、その直後にも、また熊の姿が確認された。

そのほかに、山あいでも10月下旬に開かれたウォーキング大会でも、主催者らが熊対策に神経をとがらせていた。10km超の山道を歩くこの大会は毎年秋の恒例イベントで、地域の小学生たちも学校行事として参加する。子どもたちを含む参加者が万が一にも熊に遭遇することがないように、前日と当日朝にはコース上の数か所で爆竹が鳴らされた。大会の最中にも、道中のところどころでスタッフが空砲ピストルを打ち鳴らし、警戒する措置が取られた。

実は、前年のこの大会では、開催直前に周辺で熊の出没が相次いだ。小学生の学校行事としての参加は見送りとなり、子どもたちは「自主参加」に。そんな前年の経緯もあり、2025年の大会は徹底した対策を取った。大会を無事に終えた後、主催した地域の人たちは口々に「熊が出なくて本当によかった」と話していた。

また、実際に家の近くで熊を見かけたという高校生もいる。下校時、あたりが薄暗くなった時間帯に、駅から徒歩で帰るところだった。山ぎわの国道を歩く姿を見かけ、走って家に帰ったという。母親は「玄関先にまで熊が来たというニュースもあったから他人事ではない。近くにいると思うと怖い」と話す。

日常生活を脅かした、2025年の熊騒動。熊と人間との接点にあたるこの中山間地に身を置いていると、眼前の騒動は、単に「人里に現れる熊からいかに身を守るのか」という問題ではなく、「中山間地の暮らしの持続性をどう考えるのか」という問題でもあると感じる。

地方の周縁部から過疎化は進む。その波が迫ってくるのと同じように、人と熊との境界線もまた、さらに私たちの生活圏の方へと押し迫ってきている。「熊が出て普通に住めなくなるかもしれない」という恐れがある地域を、これからどうしていくのか。

2026年以降もまた、同じような熊騒動が起きないとは限らない。熊に対する緊急的な対応のみにとどまらず、地方そして中山間地の将来を改めて考える契機としたい。